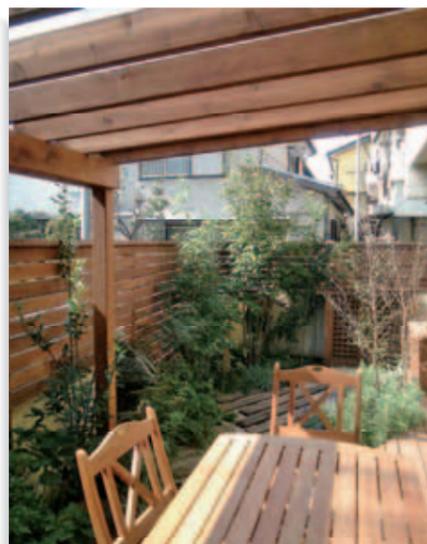


建築家でありガーデンデザイナーでもあるアトリエ六曜舎の湯浅剛さんに、前号に引き続き、庭と建物をつなぐ居心地よい自在空間の作り方を教わります。庭をデザインするうえでのコンセプトの立て方、骨格の重要性。子どもの原風景となるような自然を取り込んだ楽しい生活の景色——そんな庭づくりを語っていただきました。



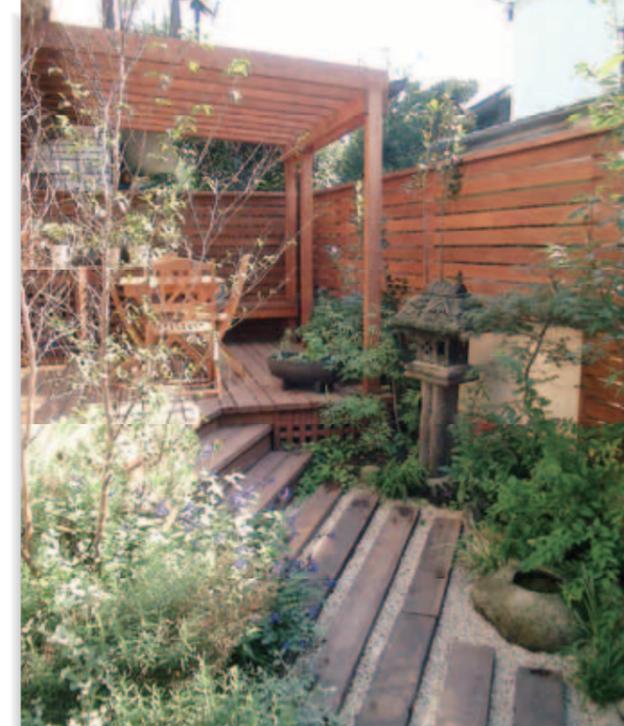
屋根付きのデッキで天候に関係なく庭で団楽。木塀が目隠しになって、外からの視線を気にせずくつろげます。
(1 様邸/右ページの写真も)



草花と水のせせらぎを楽しむ庭。美しい景色と心地よい水音を観賞しながらゆっくり休養できる癒しの空間です。

アウトドアリビングを楽しむ庭。家族で食事をしたりガーデンパーティなど活動的に。樹木が日射しを遮るなど環境調節も。

ハーブと菜園のある収穫を楽しむ庭。左側にハーブガーデン、右側にキッチンガーデンを設けたアクティブなプラン。



木の生い茂った和の庭をリフォームして家族の集まるデッキを設置。日当たりのいい場所にはハーブ、塀側には日陰に強い和の植物を植えて和洋折衷の庭に。



地面には枕木と砂利を敷き、デッキからも出入りしやすい変化に富んだ庭に。水鉢や灯籠は以前の和の庭で使っていたものです。

団楽する、回遊する、本を読む庭でなにをしたいのか

湯浅 剛 <アトリエ六曜舎>

「観賞」「休養」「活動」「環境調節」庭の目的は優先順位をつけて

前回は庭と建物の関係についてお話ししましたが、今回は、庭をデザインする基本的な考え方と手法を紹介していきます。庭をデザインする前に、まず考えなくてはならないのは、その庭のおもな利用目的や機能、全体のイメージといった「コンセプト」をはっきりさせることです。

コンセプトがまとまらないうちにプランニングを進めてしまうと、あいまいで漠然とした空間になってしまいます。無駄な場所ができたり、使いにくかったり、それぞれの場所の要素やイメージがまちまちで落ち着かない庭になってしまう恐れがあります。

なかでも、庭をどう使いたいという「目的」は重要です。それは大きく「観賞」「休養」「活動」「環境調節」などに分類されます。こういった庭の目的について、住まい手のもっとも重要な希望から小さな希望まで、優先順位をつけながら整理しましょう。そうすればコンセプトがより明確になります。

右ページのイラストはある一定の目的を盛り込んだプランです。「草花と水のせせらぎを楽しむ庭」は、テラスで景色を眺めながらゆっくり休養し、植物や水音を観賞。心安らぐ癒しの庭です。

「アウトドアリビングを楽しむ庭」は、キッチン付きのウッドデッキを設置したので、家族で食事をしたりガーデンパーティをするなど活動的な使い方ができます。要所要所の樹木が夏の日射しを遮って高温をやわらげるなど、環境調節にもひと役買っています。

「ハーブと菜園のある収穫を楽しむ庭」は、庭にハーブガーデンとキッチンガーデンを設けて、ガーデニングを思いっきり楽しめるアクティブなプランです。

古い庭をリフォームして家族が集まって団楽するデッキを設置

もっと具体的に、事例でご紹介しましょう。

1 様邸(上の写真)はリフォームです。もともと木がうっそうと繁った庭でした。もうちょっと明るくしたいというご希望があって木を少なくし、歩ける道をつくり、家族が集うデッキを設置。以前木が多かったときは、室内から眺める程度の庭でしたが、リフォーム後は家族が外に出て団楽を楽しめる庭になりました。

できるだけデッキを広く取りたかったので、かわいそうなのですが、既存樹木をかなり取り除きました。そしてデッキを木塀ぎりぎりまでつくりました。

ポリカーボネートの透明な屋根とシンクをつけたので、天候を気にせず室内感覚でいつでも家族が集い、お茶を飲んだり簡単な

食事もできますし、友人を招いてバーベキューなども楽しめます。木塀の裏は隣家のアプローチですが、塀と植栽がさりげなく視線を遮ってくれるので、落ち着いてくつろげる場所になりました。

もとの庭にあった水鉢や灯籠などを生かして和洋折衷的な印象に。日当たりのいい場所にはハーブを、日陰になる場所には半日陰に強いムラサキシキブやアオキなど和の植物を植えました。花色のトーンがひかえめな葉物を中心にしているので統一感があります。また、狭い庭にあまり大きな葉のものを植えると、圧迫感が出てますます狭苦しくなってしまうので、細かい葉を使うことで広く見せるように配慮しました。

ボードウォークを渡して通路にすると狭い庭も楽しく回遊できる

もうひとつの実例(P.5の写真)は、わが家の庭です。平面図を見ていただければわかるように、わが家は建物の周囲に狭いスペースがあるだけで、庭と呼べるような代物ではありません。しかし、そういう狭いところも工夫次第で面白い空間になります。

たとえば「ボードウォーク」。幅が狭く細長いスペースに木製のボードウォークを渡して、通路にしています。こういう舗装のエリアがあると、狭くてうっそうとしている庭でも雑然となくなり、

気軽に歩けます。

とくに子どもは家にじっとしていません。どんなに狭くても、見るだけでなく出られる庭があれば、喜んで探検に出ていきます。どうしてもスペースが取れなかったらテラスや玄関先でもいいので、ちょっとした遊べるスペースをつくってあげたいものです。

庭の骨格がしっかりしていればどんな植物を植えても違和感なく調和

コンセプトが決まったら、庭を具体的にデザインするわけですが、ここでまず必要なのは「骨格をつくる」こと。

僕はイギリスでジョン・ブルック氏に強く影響を受けました。もともと不思議な縁があったようで、蓼科のパラクラ・イングリッシュガーデンの設計をしたのが彼で、あそこの建物の設計をしたのが、僕が以前在籍していた一色設計事務所だったんです。

イギリス留学中、とある庭を見に行ったときにたまたま彼に会って、その後私的な園芸スクールのコースを受講したり、卒業論文のためにインタビューをさせてもらったりと、いろいろお世話になりました。

彼は伝統的なイングリッシュガーデンのデザイナーではなく、1970~80年代に新しく台頭してきたグローバルで幾何学模様